

【講演要旨】

フィールドワークする，場所をつくる，そして地誌を描く —パプアニューギニアと陸前高田をつなぐもの—

熊谷 圭知

I はじめに

本日は3年越しの最終講義の機会をいただき、ありがとうございました。たくさんの方にお集まりいただき、嬉しく思います。今日のタイトルに引き寄せて言えば、今ここに一つの「場所」が生まれていると思います。「場所」とは、「空間的な近接性によって生まれる人と人、人と事物、事物と事物の関係性の束」と、私は定義しています。この大教室は、ふだん全学教授会などで「仕方なく」集まる空間なのですが、同じ空間が、これほど濃密な場所に変容するというのは驚きです。これは私たちが、コロナ禍で失われた集いの場所をいかに切実に必要としていたかの表れでもあると感じます。

II パプアニューギニアでのカルチャーショック

最初のカルチャーショックは、1979年12月14日、パプアニューギニア大学に1年間留学するため、首都のポートモレスビーに初めて着いた日のことです。迎えに来てくれた地理学科の白人スタッフと夕食を共にして、目と鼻の先のホテルに帰ろうとしたら、「危ないから車に乗れ」と言われたのです。後でわかったのですが、ポートモレスビーの犯罪発生率は、実はリオデジャネイロやヨハネスバークなどより高いのです。パプアニューギニアが「楽園」ではないことを思い知らされました。

2番目のカルチャーショックは、1984年9月、高地周縁部のミアンミンの人々の村で、初めて単身で参与観察した時のことです。人々は、熱帯林に囲まれ、狩猟やタロイモ畑を作って昔ながらの生活をしていました。しかし服装や意識は変わっていました。男はペニスケースだけ、女は草の腰蓑という昔の格好はもう恥ずかしいと、ぼろぼろでもシャツや短パンを身に着けていました。滑走路は、外部とつながる唯一の手段で、ブルドーザーもチェーンソーもないので、何年もかけて文字通り手作りで建設されていました。ある日、教会の牧師がやって来て、これから自分の言うことを書き留めろと言い、「政府は村の飛行場の維持や学校などにもっと金を出すべき」と、強い調子でまくし立てました。ニューギニアの奥地

の村人は、けっして自然に調和し満ち足りて暮らしているわけではないことを思い知らされたのです。

3番目のカルチャーショックは、1993年8月、今も通い続けているブラックウォーター湖畔のクラインビット村での村長の語りです。「お前がこの村に来て何年になる。その間、お前はこの村のことを本に書いたりして出世しただろう。でもこの村を見回してみるがいい。何も変わっていない。それをどう思う。お前はこの村に何ができるんだ」。私は、自分は何者でなぜここに来たのか、毎回村人の前で説明してきました。自分は大学の教員で、ニューギニアのことを知らない日本の若者に、授業などで伝えるのが自分の仕事だと。しかし、村長の言葉を聞いた時、それでは答えにならないと思いました。

それ以来、フィールドワーカーは、フィールドに何を還せるのかというのが、私の大きな課題になりました。

III ポートモレスビーのセトルメントでの実践

1. 参与観察から見てきたこと

私の修士論文以来のフィールドは、首都ポートモレスビーのゴミ捨て場の奥にある移住者の掘立小屋集落（ピジン語でセトルメントと呼ばれます）でした。高地のチンブー州出身者のラガムガ集落で、周囲からは「危ない場所」「犯罪者の巣」などと言われていましたが、住み込んでみると、治安の悪いことで有名なポートモレスビーの中で、私にとってははもっとも「安全・安心な」場所でした。よそ者は絶対入ってこないし、顔見知りになった住民は、「ケイチ」「プロフェッサー」と迎えてくれるからです（熊谷 2019, 2022）。

1984年から住み込み調査を始めました。参与観察をして初めて見てきたことがあります。女性たちの「うちの亭主は、給料もらっても全部ビールやギャンブルに使っちゃう」という会話を聞いて、ハッとしました。修論の時は、調査票を使って、女性に世帯主は誰か、給与はいくらか聞いた後、あなたの職業はと聞くと「ない」と言われます。私は「主婦」と見なし、夫の稼ぎが世帯収入と考えました。しかし男性は収入をすべて家に入れるわけではなく、女性たちは露天商等で生活費を稼ぎ、

家族を支えていました。男が稼ぎ手であることを疑わない私自身のジェンダーバイアスの発見でもありました。

参与観察を続ける中、セトルメントを取り巻く環境は厳しさを増していきました。1990年代から、首都空間の近代化が進み、「都市美化」のスローガンの下、露天商の排除が進みます。セトルメント住民の苦境に調査研究者としてできることはないかと考え、フィールドワークの度に、大使館やJICAを訪ねるようになりました。

そのうち、私のセトルメント調査が地元新聞で紹介されるなどの出来事も手伝って、都市貧困問題にアプローチしようとしていたJICAのPNG事務所からオファーを受け、2000年9月から1年間の専門家（職種は「社会調査法」（都市貧困対策））派遣が決まりました。

2. JICA専門家としての活動

私が心がけたのは、政策に影響力を持つ人たちのネットワーク構築でした。2001年2月にセトルメント問題に関するワークショップを企画しました。

ワークショップの目的は、セトルメントに関心を持つステークホルダー（利害関係者）を集め、公論に乗せることでした。午前中にカウンターパートのジョン・ムケ講師（パプアニューギニア大学）と私がセトルメントの現実を報告し、午後にセトルメント政策に影響力を持つ国会議員や行政関係者、地権者、セトルメント住民にコメントしてもらいました。終日テンションの高い議論が続き、成功裏に終了しました。

ところが翌日の新聞に「セトルメントはますます暴力的になる」という見出しの記事が掲載されて驚きました。それに対する抗議を経て、われわれの見解を新聞に掲載する機会を獲得することができました。

私は「ポートモレスビー：分断される都市」というタイトルの論説で、ポートモレスビーで、持てる者と持たざる者の格差、居住空間のセグリゲーションが進行し、集団間のステレオタイプと差別が増幅され、治安が悪化していること、セトルメントを排除するのではなく、都市空間・社会に統合することが必要と語りました。

その2カ月後、首都庁のパイロットプロジェクト構想が発表されました。これはセトルメント住民の地代支払いを条件に、地権者が居住権を承認し、首都政府がサービスを供給するという画期的なものでした。それを受けラガムガ集落では、住民委員会が創られ、毎日活発な議論が繰り広げられました。それまで自らの居住環境の改善に熱心でなかったように見えた住民が大きく変貌するのを目の当たりにしました。

帰国前日、セトルメントでお別れ会が開かれ、住民委

員会のメンバーたちから「プロフェッサーは、自分たちを助けるために長年調査をしてきたのだ」という評価をもらいました。自分がやってきた調査研究が、対象者自身から認められた幸福な瞬間でした。

残念ながら、その後首都庁のプロジェクトは、地権者間の争いにより頓挫し、ラガムガ集落は直接の裨益者にはなれませんでした。しかし後任の専門家たちの尽力で、コミュニティ開発プロジェクトが立ち上がり、首都庁役人も加わった参加型開発の手法による環境改善が、複数のセトルメントで実現しました。

IV クラインビット村での実践

1. 村の暮らし

私が1986年からフィールドワークを続けているのが、セピック川南部支流域に位置するクラインビット村です。人口は500人ほど。海岸の町ウェワクから車で4時間、さらにモーターカヌーで4～8時間かかります。

生業は、サゴヤシ澱粉の採取と漁労です。私は最初、成人儀礼を受けた男だけの空間である精霊堂に寝泊まりして、もっぱら長老から話を聴きました。しかし家族の暮らしが見えないので、1990年以降はホストファミリーの家に寄宿しました。60㎡くらいの広さの仕切りのない家に十数人の家族が寝起きしていて、蚊帳の中だけがプライベートな空間でした。

2. 村と村人の変化

村では、頻繁な「おねだり」に悩まされました。「今度来る時には、〇〇を持って来てくれ」という類のリクエストで、腕時計やサッカーボール、最近では携帯電話、などです。それらは、現金収入のない村人には高値の花ですが、町に行けば目に入り、欲求を掻き立てられる商品です。互酬性の世界に生きる人々にとって、持てる者が持たざる者を助けるのは当然ともいえますが、私には村人たちが「開発」を、自らには届かないものとして、外部化してしまっていると感じました。

2006年には、村の5カ所でグループミーティングを持ちました。私のもっぱら長老の男たちから話を聞いてきたので、女性や若い男たちの本音を聞きたいと思ったからです。私の投げかけた問い「この村の問題は何か」に対し、「学校」と並び、女性や若い男たちから「(私たちの)ハードワーク」という答えが返ってきて驚きました。それは伝統的な性別役割分業を批判的に対象化する30代くらいの若い女性たちが出現したことを意味します。全村集会で結果を報告し「自分たちで何ができるか考えてほしい」と投げかけて、村を離れました。

2008年に再訪すると、手作りの学校ができていて驚き喜びました。しかし州政府に公認されるためには、教員の教職訓練が必要です。お茶の水地理学会にも呼びかけ、その費用を支援しました。2013年には州政府から公認され、村出身の校長が自ら望んで赴任してくるなど、学校は順調に発展しています。2009年には教室で、長老から聞き取った村の歴史などを子供たちに講義しました。「場所の知」を少し村に還せた気がしました。

3. 外部者の役割と「場所の知」の承認

最近私が力を入れているのは、外部者を村に呼び込むことです。2011年8月には、立教大学の野中健一氏の科研調査隊を連れてきました。現金収入がなく購入食料がないのが調査地に好都合でした。村人は、自分たちが選ばれたことを喜び、調査に積極的に協力しました。外部の研究者が、伝統的な食文化に関心を持ってくれたことが、村人を元気にしました。

その後も何度か、お茶大の学生やお茶の水地理学会のOGたちを連れて、村を訪ねました。2017年には池口明子氏（横浜国立大学）が担当する放送大学の「現代人文地理学」チームが来て村の生業を撮影し授業を作りました。これらは、外部者による、村の「場所の知」の承認につながるものだったと思います。

V 陸前高田での実践

1. 震災後の初訪問

岩手県陸前高田市は私の父の生まれ故郷です。東日本大震災の日、私はクラインビット村にいました。ラジオを聞いた村人が日本で何か起こったらしいと知らせてくれ、翌日電波が繋がるまで出て、家族に電話し事態がわかりました。陸前高田は市街地が壊滅したらしい…と聞かされました。

震災後初めて陸前高田を訪ねたのは、2011年4月21日でした。同僚の内海成治氏（現大阪経済大学客員教授）と小田隆史氏（現東京大学准教授）が同行しました。隣接する気仙沼、大船渡と一緒に訪ねたのですが、三つの町は匂いが違いました。大規模な火災が起こった気仙沼は油の臭い、大船渡は魚の腐った臭いが漂っていました。その間にある陸前高田は何も匂いがしませんでした。それだけひどくやられたのだと実感しました。

2. 地域研究実習（陸前高田実習）の過程

連休明けに訪問の報告会を行なうと、熱心な学生たちが大勢詰めかけ、「被災地」に何か貢献したいという熱意を感じました。学生たちを安全にまとまって連れて行け

る方法として、グローバル文化学環の「地域研究実習」の授業を活用することにしました。

6月に陸前高田を再訪し、米崎小学校仮設住宅の自治会長、佐藤一男氏と出会いました。集会所でお茶を飲みながら話をする形での学生たちの訪問を受け入れてもらいました。秋以降、3人の教員が交代で引率して、年4回（学生は5名ずつ入れ替わり、博士課程学生のTAは毎回継続して）の実習の授業が始まりました。

この実習は、フィールドワーク実習としては大変質の高いものだったと思います。そこにはいくつかの理由があります。第一に、被災地に行くことが、身体性を通じた強烈な「場所」の体験だったことです。第二に、米崎小仮設住宅集会所という「居場所」の存在です。第三に、陸前高田の人たちの語りが大変テンションの高いもので、自らの体験を伝えたい思いにあふれていたことです。参加学生たちは、「被災地／者」という色眼鏡を外し、陸前高田の人たちの温かさに心を揺さぶられて帰ってきます。そして「外部者」としての自分に何ができるのかと自問することになります。

3. 復興過程と失われた風景への思い

陸前高田は「山も、川も、海もあるよいところ」でした。気仙川が作る沖積平野に市街地が広がり、三陸地方には珍しい広い砂浜があって、日本百景の高田松原には、県内外から海水浴客がやって来ました。

震災後は、山を削り住宅の高台移転が進められる一方、その土を運んで浸水域の市街地を十数メートル嵩上げる大規模な公共工事が進められました。一方、住民からは津波により失われた街並みへの愛着も語られます（熊谷 2020）。嵩上げ地の中心部には店舗も立ちつつありますが、空き地も目立ちます。区画整理事業と高台への防災集団移転を組み合わせることにより、浸水した土地に戻らない人が多く出てしまったことが大きな理由ですが（中井ほか編 2022）、2013年の意向調査後の状況変化に柔軟な対応がなされなかったことも要因です。

4. 被災地・被災者と外部者の役割

「被災地」の「被害」には、物質的・経済的なものだけでなく、精神的・心理的なものも含まれます。家族や親戚、友人・知人を失う、家屋敷や慣れ親しんだ風景や市街地を失う…それを「場所喪失」(displacement) と言い表すことができるでしょう。津波の被災地とは、この「場所の喪失」が広範かつ一時に生じた地域です。

陸前高田で、知人・友人、慣れ親しんだ場所や風景を失わなかった人はいないので、すべての人が「被災者」

です。しかし地元では、家を失った人と失っていない人の間には線引きが存在します。後者は自らを「被災者」とは呼ばず「在宅者」と言います。「被災者」もまた均質・一枚岩の存在ではないのです。

上野千鶴子氏はケアの議論の中で、当事者を「自己のニーズを充足させる権利を持つ主体」ととらえています(上野 2011)。当事者としての「被災者」は、外部の支援を待つ無力な人たちではなく、震災によって理不尽な被害を受け、多様なニーズを持つ人たちです。私たち外部者ができることは、フィールドワークを通じた相互作用の結果、当事者に顕在化する被災地の「ニーズ」に責任を持ちつつ、かかわり続けていくことだと思っています。

VI フィールドワークと場所、そして地誌を描くこと

私のフィールドワークの定義は、「研究対象が存在する場所に身を置きながら、文献や統計資料などでは得られない一次資料を集める調査方法」です。調査者が調査対象の前に現前することは、両者のかかわり(絶えざる相互作用と交渉の過程)を生み出します。その中でフィールドワーカーは、フィールドの「外部」ではなく、生成する「場所」の一部に取り込まれていきます。

その「効用」は二つあります。第一に、それを通じて初めて対象への真の理解が可能になることです。私たちは観念的な枠組みでものを考えがちですが、現実には人を動かしているのは、日常の場所を形作る関係性です。それは柔軟で流動的、可変的なものだからです。

第二に、調査研究者がフィールドの人々と協働して「場所」を構築することが、フィールドに還す実践につながることで、それにより初めて調査研究が、一方的にデータを奪い取るだけのものではなくっていきなすです。

最後に「地誌」について。私は1992年にお茶大の地理学科に赴任した時、地誌学講座に所属しました。それま

で私は、「地誌」に古臭いイメージを持っていました。

「地誌」とは、地域や場所の物語です(熊谷 2019, 2022)。遠くの場所に行って帰ってきた人の、想像力を掻き立てるような物語が、本来の地誌であり地理の原点だと思えます。書かれたものだけが地誌ではありません。語りや、インスタグラムも地誌の入り口です。「地誌する」という動詞で使うのも良いかもしれません。

グローバル化時代の地誌は、単なる知識の羅列であってはならないと思います。遠い他者を、自己と無関係の(劣った)変わらぬ存在として「他者化」して終わってしまうからです。途上国の悲惨な出来事を聞いて「日本に生まれてよかった」と結論付けてしまうように。

私がめざす「動態地誌」は、遠い場所・人々の存在をリアリティをもって伝え、読者や聴き手を揺さぶり、つながりたいという欲求を生むような地誌です(熊谷 2019)。社会は変わらないと諦めている若い世代が多い中で、閉塞した世界の現実を変えていく力になるような「地誌」を皆で追求していきたいと願っています。

文献

- 上野千鶴子 2011. 『ケアの社会学—当事者主権の福祉社会へ』太田出版.
- 熊谷圭知 2019. 『パプアニューギニアの「場所」の物語—動態地誌とフィールドワーク』九州大学出版会.
- 熊谷圭知 2020. 陸前高田の原風景と風土の復興. 環境と公害 49(4): 31 - 36.
- 熊谷圭知 2022. 『つながりの地理学—マイノリティと周縁からの地誌』古今書院.
- 中井検裕・長坂泰之・阿部 勝・永山 悟編 2022. 『復興・陸前高田—ゼロからのまちづくり』鹿島出版会.

くまがい・けいち

お茶の水女子大学名誉教授

Doing Fieldwork, Making Places, and Drawing Regional Geography: Efforts in Papua New Guinea and Rikuzentakata City

KUMAGAI Keichi